

# 学術ポータル企画と運用

尾城 孝一

千葉大学附属図書館情報サービス課長

はじめに

平成14年3月12日に発表された科学技術・学術審議会の「学術情報の流通基盤の充実について（審議のまとめ）」において、大学等から発信される様々な学術情報が簡便に利用できるためには、総合的な情報の発信窓口（ポータル機能）を設置することが必要とされ、大学図書館には、大学等からの情報発信機能の整備に関して、総合的な企画・立案を行う機能及び発信される情報のポータル機能を担うことが求められている。

本講義では、この答申の提言に沿って、「学術ポータル」を学内で生産された電子的学術情報の「統一した発信窓口」と捉え、それを実現するための具体的な仕掛けとして「機関リポジトリ」の構築と運用について取り上げる。

## 1. 問題の所在

### 1.1 学内で生産された電子的学術情報

論文（学術雑誌掲載論文、紀要論文、学位論文）、テクニカル・レポート、単行本、教材、データセット、ソフトウェア等々

### 1.2 現状分析

- (1) 長期的な保存体制の欠如
- (2) セキュリティ確保に対する不安
- (3) 組織化の問題
- (4) 統一した発信窓口の不備
- (5) 隠れた研究成果の存在

### 1.3 問題点

#### (1) 大学から見ると

- ・学内の学術情報（研究成果）の社会への還元（説明責任）を十分に果たしていない
- ・大学の財産である貴重な学術情報（研究成果）の散逸の危険性

#### (2) 学内研究者から見ると

- ・自らの学術情報（研究成果）を管理・発信・保存するためのコスト

#### (3) 学外から見ると

- ・大学の研究活動、研究成果の総体が見えない

## 2. ソリューションとしての機関リポジトリ

### 2.1 機関リポジトリとは

・大学等の学術機関内で生産された,さまざまな学術情報を収集,蓄積,配信することを目的とした,インターネット上の電子書庫

### 2.2 コンテンツの要件

(1)特定の学術機関の構成員によって生産されたコンテンツ

(2)学術的価値

(3)累積的かつ永続的

(4)オープンかつ相互運用可能

### 2.3 海外の動向

(1)事例

・CODA (カリフォルニア工科大学),DSpace@MIT (マサチューセッツ工科大学),eScholarship (カリフォルニア大学)

(2)全国的プロジェクト

・ARROW (オーストラリア),CARL (カナダ),DARE (オランダ),FAIR (イギリス)

(3)SPARC の支援活動

・機関リポジトリ擁護論 SPARC 声明書 (The Case for Institutional Repositories: A SPARC Position Paper )』(2002年)

・学術機関リポジトリチェックリストおよびリソースガイド (Institutional Repository Checklist & Resource Guide )』

### 2.4 期待される効果

(1)大学にとって

・教育研究機関としての知名度の向上を図ることができる

・学内で生産された学術情報 (研究成果)の一元的な管理,発信,保存体制を通じて,社会に対する説明責任を果たすことができる

・本学の最新の学術情報 (研究動向)を開示することにより,産学連携を一層促進することができる

(2)学内研究者にとって

・学術情報 (研究成果)の管理,発信,保存のコストを節約することができる

・自らの学術情報 (研究成果)の視認性 (visibility)を高めることができる

・学術情報 (研究成果)を広く公開することにより,企業等からの共同研究の提案を引き出すことができる

・各種申請に必要な業績一覧等を随時出力することができる

(3)学外者にとって

・本学の学術情報 (研究成果)を一元的に検索し,これにアクセスすることができる

・連携を望む企業等は,本学の研究動向を迅速に把握することができる

### 3. 千葉大学における機関リポジツド計画

#### 3.1 経緯

#### 3.2 システムの概要

#### 3.3 システムの紹介 (デモンストレーション)

### 4. 機関リポジトリ構築と運用の課題

#### 4.1 学内合意形成

(1)なぜ機関リポジトリが必要なのか?

(2)なぜ図書館が運営するのか?

(3)財源の確保

#### 4.2 システム構築

(1)オープン・ソース

(2)商用ソフトウェア

(3)ホスティング・サービス

#### 4.3 運用指針の策定

##### (1)コンテンツ・ガイドライン

・登録可能な投稿者 (誰が登録できるのか?)

・登録可能なコンテンツの種別 (論文, 教材, ソフトウェア, データセット等々)

・登録可能なコンテンツの形態

・品質管理 (査読に相当する品質管理のプロセスが必要か?)

・登録したコンテンツの削除 (取り下げ)

##### (2)利用許諾契約書

・コンテンツをリポジトリに蓄積し公開するための非排他的権利の譲渡を求める

#### 4.4 登録促進

##### (1)障壁

・インセンティブの欠如

・登録行為に対する抵抗感

・著作権に関する懸念 (特に学術誌掲載論文の場合)

##### (2)乗り越えるための方策

・メリットの強調 (アメ)と強制力 (ムチ)

・簡易な登録インターフェースの提供と図書館員による登録支援

・出版社のポリシーの報知

### 5. 今後の展望

#### 5.1 国内の取組み

・国立大学図書館協会学術情報委員会デジタルコンテンツ・プロジェクト

学術機関リポジトリ構築ソフトウェア実装実験プロジェクト(国立情報学研究所)

## 5.2 国立情報学研究所 (メタデータデータベース)との相互補完的な情報発信システムの構築

(参考資料)

Crow, Raym. The case for institutional repositories: a SPARC position paper. 2002.

<[http://www.arl.org/sparc/IR/IR\\_Final\\_Release\\_102.pdf](http://www.arl.org/sparc/IR/IR_Final_Release_102.pdf)>

Crow, Raym ; 栗山正光, 中井えり子訳. 機関リポジトリ擁護論 SPARC 声明書.

<[http://www.tokiwa.ac.jp/~mtkuri/translations/case\\_for\\_ir\\_jptr.html](http://www.tokiwa.ac.jp/~mtkuri/translations/case_for_ir_jptr.html)>

Crow, Raym. SPARC institutional repository checklist & resource guide. 2002.

<[http://www.arl.org/sparc/IR/IR\\_Guide\\_v1.pdf](http://www.arl.org/sparc/IR/IR_Guide_v1.pdf)>

Crow, Raym ; 千葉大学附属図書館 IR ワーキング・グループ訳. SPARC 学術機関リポジトリチェックリストおよびリソースガイド.

<[http://mitizane.ll.chiba-u.jp/information/SPARC\\_IR\\_Checklist.pdf](http://mitizane.ll.chiba-u.jp/information/SPARC_IR_Checklist.pdf)>

Lynch, Clifford A. Institutional repositories: essential infrastructure for scholarship in the digital age. ARL Bimonthly Report. 226, 2003.

<<http://www.arl.org/newsltr/226/ir.html>>

尾城孝一, 杉田茂樹, 阿藤品治夫, 加藤晃一. 日本における学術機関リポジトリ構築の試み - 千葉大学と国立情報学研究所の事例を中心として. 情報の科学と技術. 54(9), 2004, pp.475-482

科学技術 学術審議会研究計画 評価分科会情報科学技術委員会デジタル研究情報基盤ワーキング・グループ. 学術情報の流通基盤の充実について (審議のまとめ)』, 2002.

<[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/toushin/020401.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/toushin/020401.htm)>

国立大学図書館協議会図書館高度情報化特別委員会ワーキンググループ. 電子図書館の新たな潮流 情報発信者と利用者を結ぶ付加価値インターフェース 』, 2003.

<<http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/j/publications/reports/73.pdf>>

高木和子. 機関リポジトリ. 情報管理. 46(6), 2003, p.405-411.

文部科学省研究振興局情報課. 学術情報発信に向けた大学図書館機能の改善について (報告書)』, 2003.

<<http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/j/documents/mext/kaizen.pdf>>